

ワクワクする作業が蘇るとき

酒井 ひとみ

関西福祉科学大学

今日は、家族揃って主人の誕生日を祝った。奇しくも私が癌の手術をして生まれ変わった3周年の日でもある。ほぼほぼ絶っていたアルコールを今日は解禁し、おかしなイントネーションのボケツッコミも上々だ。

今度の年末年始は台北の夜市で美味しいモノを食べたいと思っている私は、皆に予定を聞き、全員フリーであることを確認した。「お母さんは、台北で美味しいモノを食べに行きたいと思ってるけど、お父さんは『大阪でノンビリ年末年始を過ごすのもいいな』と言ってるんだ～」と皆の反応を伺う。

長女が「そう言えば大阪に移り住んで7年が経とうとしてるのに、一度もお正月を大阪で過ごしたことが無い。」と鋭い指摘をしてきた。そして、美味しい御節料理をどこかで注文しようと提案してきた。

「それなら、手作りがいいんじゃない？ひとみの味の御節料理！」と久々のアルコールで冗舌になった口が滑った。「ひとみの味」という修飾語は、我が家では凝った手作りの料理を意味する言葉である。子供が小さかった頃、手抜き料理ばかりしている私に父が「ひとみの味の運動会弁当が食べたい」と諫めたのが発祥(?)の由来だ。だから多少自虐ネタっぽい、それでいて懐かしい匂いがする言葉でもある。

「お正月といえばまずお祖母さん秘伝の朝鮮漬けね。これは曾祖母さんからの伝承したレシピだけだね～」とこれだけは外せない料理を挙げる。次女が「数の子はできるの？」と合の手を入れる。「もちろん！塩抜きして、薄皮剥いだから味付けするよ。芽付のクワイも煮ようか。栗きんとんもいいね。」とドンドン口を突いて出てくる。「わーっ、お母さん作ってよ～」と若干丸投げ状態の娘の発言。それに対して、「一緒に作る？やらずに作れないのと作れるけど作らないのは違うよ。」と酔いが加速するような言葉を投げかけてみた。すると、「お祖母ちゃんに料理を教えてほしいってお願いしたことあったけど、教えてもらえなかったんだよね。お節料理が出来るようになりたいから教えて。」と返ってきた。「であれば、あなたたちのoccupationってことかな？それなら、そのoccupation実現のためにひとみの味を伝授するよ。わたしは作業療法士だから。」と喋る喋る。だって、台北の夜市と引き換えるんだもの、そのくらい言わせてほしい。娘たちは、強くうなづきながら、それでいて少し同調するような雰囲気醸し出しながら「occupationです!!」と快活に応答した。よっしゃー！「では、やりましょう!!」と手を打った。今は亡き両親と皆で新年を祝った暖かな情景が蘇ってきた。私の蘇ったoccupationは、2か月以上先のことなのに、私を今からワクワクソワソワさせる。

そんなこんなで、我が家での久々のハレ行事をじっくりと腰を据えてやってみる気になった。でも、なんで止めちゃっていたのか？そこで初めて、お節料理を象徴する新年行事を母が他界してから今までずっと無意識的に避けていたことに気づいた。両親を失った辛さと強く結びついてきたお節料理づくりというoccupationは忌諱される存在になっていたのかもしれない。今年は、結婚適齢期(娘本人がそう思っている)を意識し始めた二人の娘がひとみの味のお節料理に興味を示した。これも再びやろうと思うきっかけにはなっているが、気兼ねない雰囲気、経験を共有した家族とそのoccupationを語り合うなかで、楽しい大切な愛おしいoccupationであったことに気づかされたのだ。大きな瘡蓋がポロッと落ちた感覚だ。まさに、語り(narrative)の効用といえるが、脳科学者の利根川氏*の言葉を借りれば“海馬の記憶を書き換えた”と表現できるのだろうか。彼らの研究では、記憶は良くも悪くも書き換えられるのだという。私は大病を経験してから、余生に対する意識がより強まった。老い先短いかも!かも?という切り札を振りかざし“頑張らないことを頑張り、やりたいことだけして生きる”スタンスを明言できるようになった。そんな私は、occupationの力を借りてこれからも、ワクワクする作業に浸って余生を過ごしていきたい。

2015年10月18日

*Ramirez, S., Liu, X., Lin, P.A., Suh, J., Pignatelli, M., Redondo, R., Ryan, T.J., & Tonegawa, S. (2013). Creating a False Memory in the Hippocampus, *Science*, 341, 387-391.